

第 181 話〈語り部逝く〉の要約と参考資料

第 181 話〈語り部逝く〉の要約

今年 2 月、公害を克服して自然が蘇生した土呂久の語り部佐藤ツルさんが亡くなりました。泉福寺の住職とともに読経する講元の洋さんの声が「村にまた昔の和合会が戻りますように」という願いに聞こえ、西方浄土を表わした祭壇が再生された和合の郷と重なってきます。

第 181 話〈語り部逝く〉の参考資料

181-1 土呂久に学ぶ環境学習の歴史

2016 年

- 1 月 アジア砒素ネットワークに「土呂久公害」のパネルづくりを依頼
- 3 月 パネル「土呂久」完成
- 8 月 1 日 宮崎県とアジア砒素ネットワークが「土呂久公害の教訓を次世代に残すための環境教育検討業務」の委託契約を締結
- 8 月 17 日 富山県婦中町の「清流会館」見学・ヒヤリング
- 8 月 18 日 富山県立「イタイイタイ病資料館」見学・ヒヤリング
- 8 月 19 日 新潟県立「環境と人間ふれあい館」見学・ヒヤリング
- 8 月 20 日 新潟県阿賀野川市の「あがのがわ環境学舎」見学・ヒヤリング
- 8 月 25 日 四日市市の「四日市環境と未来館」見学・ヒヤリング
- 8 月 26 日 大阪市西淀川区の「あおぞら財団」見学・ヒヤリング
- 10 月 28 日 土呂久見学後に「土呂久を伝える環境教育」第 1 回検討会。土呂久公民館で
- 12 月 16～18 日 第 4 回公害資料館連携フォーラム in 水俣に参加

2017 年

- 1 月 30 日 「土呂久を伝える環境教育」第 2 回検討会。土呂久公民館で。
- 2 月 12 日 宮崎県が土呂久公民館で「環境教育」に関する説明会を開催。土呂久公民館：佐藤元生ら 9 人、宮崎県：恒吉、アジア砒素ネットワーク：川原、高千穂町：2 人
- 2 月 28 日 「土呂久を伝える環境教育」第 3 回検討会。土呂久公民館で。
- 3 月 16 日 「土呂久公害の教訓を次世代に残すための環境教育検討事業」の報告書（案）を検討委員 8 人に送って意見を求めた
- 3 月 28 日 「土呂久公害の教訓を次世代に残すための環境教育検討事業報告書」を宮崎県に提出

- 8月31～9月1日 宮崎大学生の「土呂久に学ぶエコモニターツアー」実施
- 2018年
- 10月20～21日 熊本大学生の「土呂久に学ぶワークショップ」実施
- 2019年
- 3月 宮崎県が土呂久地区の見学案内の看板4枚を立てる
- 2020年
- 2月1～2日 佐賀大学生18人参加の「土呂久に学ぶフィールドワーク」実施
- 2020年
- 12月22～23日 宮崎国際大学生18人参加の「土呂久に学ぶフィールドワーク」実施
- 2021年
- 11月15～16日 宮崎国際大学生16人参加の「土呂久に学ぶフィールドワーク」実施
- 2022年
- 11月12～13日 南九州大学生10人参加の「土呂久に学ぶフィールドワーク」実施

181-2 NHK 宮崎放送局制作「土呂久に生きる」(2019年10月18日放送; 生田晃子ディレクター)

(ドローンで集落を撮った映像。あわい緑が美しい)

ナレーション「宮崎と大分の県境 古祖母さんの中腹の谷あいに、珍しい名前を持つ小さな集落があります。高千穂町土呂久。現在およそ70人が農業を営みながら暮らしています」

(大切坑手前の鍵がかかったフェンス。「この先関係者以外立ち入り禁止」)

ナレーション「かつてこの土呂久という名前が全国的に知られる事件がありました。土呂久ヒ素公害。亜ヒ酸の製造が行なわれ、その影響で多くの住民が砒素中毒症に苦しみました。国によって公害病と認定されてからおよそ半世紀。記憶の風化が進むなか、新たな動きが起こっています」

(フェンス越しに大切坑を見ようとする見学者=2019年5月19日実施「土呂久の宝さがし」エコツアー=の一行。鉾山跡地で説明する川原。慎市)

ナレーション「新たな動きが起こっています。行政や外部の支援者が中心となり、公害の教訓を後世に伝えようとする活動です」

シナ「伝えることが必要。こういうことがありました。また起こらないように」

(公民館、消防ポンプ庫)

ナレーション「一方、土呂久で暮らす住民たちには複雑な思いがありました」

(公民館の台所で)

和明「公害があったところに住んでいるとか、わざわざそういうこと思わんやろ」

元生「過去の公害に重点を置かんでくれち」

ナレーション「かつて公害を起こした土呂久で、人々はどういう思いを抱きながら暮らしているのか、その声に耳を傾けました」

(鉦山跡地のサクラ)

ナレーション「土呂久の里にサクラが咲き始めた3月の末。土呂久の里に1台のトラックがやってきました」

(トラックが公民館前に案内板を設置。土呂久地図を写す)

ナレーション「公民館の前に設置されたのは、県が設置したものです。かつての鉦山や施設などを記載しています。農薬の原料になる亜ヒ酸製造が始まったのは大正時代のこと。鉦山の操業は、中断をはさんで昭和62年まで続き、あわせて40年もの間、煙が集落に流出し、多くの住民が呼吸器などの病気を発症し、73年に公害病に指定されました。こうした歴史を伝える場所は土呂久にはほとんど残っていません」

県環境管理課職員「土呂久公害の教訓を次世代に伝えていくために、復元が進んでいまして、鉦山をしのぶ場所がないので、案内板があると便利かな考えて設置しました」

ナレーション「この日は集落の5カ所で案内板の設置作業が行われ、その様子を少し距離を置いて見守っている人がいました」

(見守る元生と和明)

生田「どうですか、立ってみて」

元生「感想？ 何もねえ」

和明、笑い声

生田「この看板は」

元生「イメージ通りとはいかない」

ナレーション「県の取り組みを地元の人々はどう受け止めているのか。現役世代が集まる場があると聞き、話を伺いに訪れました」

(公民館のまわりで草刈りやゴミ拾いをしている)

ナレーション「共同で草刈りをおこなっていたのは、自治組織の中心人物である40～60代の男性。みな土呂久で生まれ育ち、農業や畜産で生活しています。共同作業のあとでおこなっている打ち上げの席。地元の贖罪を持ち合うのが恒例だそうです。この日のメインディッシュはイノシシの肉。

(公民館台所でイノシシの肉を焼きながら飲み会。ハンディカメラで会話の邪魔にならないように低い位置から撮影。元生、和明、隆彦、康男、峰春がビールを飲みながら本音で話をする)

ナレーション「まさに地産地消の暮らしを送る土呂久の人びと。今、改めて過去の公害に注目が集まっていることをどう思っているのでしょうか」

隆彦「なにも問題はねえしたい」

元生「いろいろ受け入れもしよるけ。俺の考えでは、今のところプラスじゃと」

全員「学生とか来てくれて、広がるというか」

元生「新しいか風が吹くというか」

ナレーション「一方、公害のイメージがどう伝わるか、不安もあるといえます」

峰春「ずいぶん言われたがの、俺らのころは。土呂久って言われるだけでのさんかった」

元生「じゃの。それが風評被害」

峰春「あれだけはすかんかった。土呂久出身っち言えんかった。岩戸ち言わんと。土呂久に嫁じょんやられんち」

元生「じゃったがね」

和明「錢もつとるとかーとか」

隆彦「土呂久の人は金持ち、みたいなことを」

和明「ちょうど賠償金をもらうかもらわんかちいう時代に」

ナレーション「土呂久ヒ素公害が大きな社会問題となったのは、鉱山が閉じて 10 何年か経ってからのこと」

(1984 年第一審判決後、黒装束で社長交渉)

ナレーション「裁判を通しての争いは 15 年に及びました。そうした上の世代の動きを見てきた現役世代。かつてさまざまな場で風評被害や差別を受けてきた経験から、思いは複雑だといえます」

元生「土呂久にかつて公害があったのは事実。当たり前のことだからいいっちゃが。公害に対する考え方が、土呂久住民みんないっしょではないちいうこと。それを乗り越えて、それはそれで置いといて、みんながいっしょになって頑張っている」

ナレーション「公害に対する考え方は、住民一人一人ちがう。そのことを元生さんは何度も念を押すように語りました」

(水を入れたばかりのたんぼ。)

ナレーション「およそ 80 人が暮らす今の土呂久。高齢化が進み、かつてのヒ素公害を知る人はすくなくなっています。そうした中で、公害の歴史を背負いながらも、今もこの里で暮らし続ける人がいます。佐藤ツルさん、79 歳です」

(ツルが青い雨合羽を着て手植えをしている)

ツル「これが本当の、昔からの田植えよね。雨降りでもカッパでねしてね。カッパができてからはいいちゃけど、みのかさでね、昔の人は植えよったとよ」

(山を登って、梅を摘むツル)

ナレーション「山あいを開いて暮らしをたててきた土呂久の人びと。しかし、ツルさんが若いころ、鉱山で亜ヒ酸の製造が盛んに行われ、里の暮らしにも被害を及ぼしました」

ツル「あのころ、煙の出るころは、ぜんぜんつまらんかったとよね。(梅は) 摘めんかった。葉もなんも落ちてしまって、木が枯れよったつよ」

ナレーション「新たに土を入れるなどして、この地に営みが戻るまで数十年の間、不作

がつづいたといいます。それでも、ツルさんは土呂久を離れることなく、夫と共に田畑を耕しつづけました」

(富喜男が、ツルがカルイを背負うのを手伝う)

(ツルの家の土間で)

「田んぼやらわね、水を入れたら稲が赤うとよ。藁を一系列一列ならべてね。こげな米作ってあおか、というくらい苦労しよった。育たんとよ。赤茶けて、根っこが枯れる」

富喜男「焼くるとよ。根が」

生田「土呂久から出ようってことは？」

富喜男「それはねえわ」

ツル「やっぱりね、守っていかんと、家をね。家族を、家を、先祖を守るちゅう、ただそれじゃけやね。それが自分たちに課せられた仕事と思ちよるきよ」

ナレーション「今は夫の2人、穏やかな暮らしを送っているツルさん。しかし公害の影響はいまも夫婦の暮らしに影を落としています」

(軽トラに乗ってでかける)

ナレーション「この日、20分かけてやってきたのは、町の中心部にある保健所です」

(高千穂保健所。土呂久地区住民健康観察健診の検診。ツルさん受診。神経科)

ナレーション「砒素による健康被害は数十年経って現れることがあるため、ツルさんは通い続けています」

検診医「しゃべりにくいところありますか？」

ツル「ないです」

検診医「あまり心配しなくても大丈夫です」

ナレーション「この日の健診では、ヒ素による影響は見られませんでした。一方ツルさんは子どものころから、体の不調に悩まされてきたといいます」

(小学生のツルの写真)

ナレーション「小学生のころに肝臓を患い、一時は寝込む日々を送りました。兄弟や近所の人の友だちの中には、幼くして亡くなる人もいました」

(ツルの家の台所。肝臓などいくつもの薬を飲む)

ナレーション「いまも肝臓は治らず、毎日の服薬はかかせませんが、ヒ素公害との立証はできないとの理由から、被害者に対する補償は受けとれていません」

(水道の水で薬を飲むツル)

「小さな山里で起こった公害の現実です」

ツル「仕方がないことだと思ちよるきね。鉱山が悪いとか、恨みもつらみも何もないわ。そこにうまれて育ってね。あまり動いてもおらんし。そういう、そん人の運命じゃろうね。そげ思うよ」

ナレーション「来年で80歳になるツルさん。毎朝欠かさずつづけていることがあります」

(ごはんをお供え用の小さい椀につぐ。神棚にご飯とお茶をお供えし、頭をさげるツル)
ツル「おはようございます。八百万の神様。アマテラスオオミノカミさま、水神様、龍神様、どうぞ、お召し上がりください」

(薬師堂にも供える)

「土地の神々にお米とお茶を備えてまわり、感謝と祈りをささげて回ることです」
ツル「この年まで生きていて、お茶やらをあがられる。それだけたい。そう、ここに来るるちいうことは、元気がいいけ来られるとやからね。なまんだぶ、なまんだぶ」
ナレーション「故郷の負の歴史に対して、どんな思いをいただいているのか、改めて話をうかがいました」

生田「公害のことを伝えていった方がいいか」

ツル「私はそげ思う。風化させてしもてね、何もわからんようになってしまうけど、どこまでも悪いち言い伝えていかんとね。絶対に、そげな事業を持ってきたらいかんちや。自然のきれいなところを痛めてしもちからよ。悪いことは悪いち伝えていかんといけんち、私は思う」

(アジサイを写す)

ナレーション「5月末、土呂久の集落に大勢=AANの「宝物さがし」グループ=の若者の姿がありました。土呂久を支援してきた団体が開いたワークショップ。県内の学生が集まり、土呂久の現在と歴史について学びました」

(川原が説明版を使いながら、鉱山跡の説明をする)

ナレーション「かつてこの地で何が起こったのか。若い世代が耳を傾けます。このワークショップに地元から参加した人がいました。48歳の佐藤和明さんです」

和明「土呂久は初めてですか？ 実際、どんな感じがします？」

参加者「のどか」

ナレーション「和明さんが伝えたいと考えているのは、土呂久の現在の暮らしです」
シナが青い梅をもぎって食べる。

和明「今食べても、たぶんおいしくないよ」

シナ「おいしい」

(和明がスマホの写真=梅が実っている=を見せる)

和明「こんな感じ」

和明「昔は公害があったところやけど、今はここまでよみがえったということを目の当たりにしてほしいなと」

(和牛に餌をやる和明)

ナレーション「親の代から繁殖を行ない、現在19頭の牛を飼育しています」

和明「一頭一頭親しみをもっていかんとね。性格を知っていかんとねえ。全部性格が違うから」

ナレーション「和明さんはかつて、進学と就職でいったんは故郷を離れました。家業を

継ぐため戻ってきたのは36歳の時です。その背景に、祖父母や両親に対する思いがある
といいます」

(仏壇のある部屋の壁に飾られたトネの写真を見ながら)

和明「今の土呂久になるまでの苦勞、大変さ、公害でだめじゃとあきらめちゃったら、
それで終わっていたじゃろうね。もとの生活を戻すために、生活されたっちゃと思う。
公害があったけど、それはそれとして普通に生活したって結果が、今になったと思うけ
ど」

(草刈り機で草を刈る和明)

ナレーション「4年前からワークショップでガイド役をつとめるようになった和明さん。
活動に参加する中で、過去の公害に対する意識が変ってきたといいます」

和明「その時代におらんかったわけじゃから、実感はないかな。実感はないけど、実際
に公害があったことは伝えていかんといけないという使命はあるのかな。昔あったこと
は、忘れてはいかんことやから、そっちに関しては自分たちが学ばねばいかんと」

(牛に餌をやる和明)

ナレーション「公害を乗り越えてきた故郷の今を伝えるために、過去と向き合っていこ
うと和明さんは考えています」

(夏。孝輔宅玄関前)

ナレーション「最後に訪ねたのは、土呂久でもっとも若手と言われている一家です」

(孝輔の3人の子ども。見守る孝輔)

ナレーション「3人の兄弟が庭でソフトボールの練習をしていました。父親の佐藤孝輔
さん、集落では数少ない30代です」

孝輔「お姉ちゃんが6年生、あれが3年生、一番下が2年生」

ナレーション「孝輔さんは牛の肥育をなりわいにしています。妻の浩美さんとともに町
内でも最大規模の150頭もの牛を育てています。」

(牛舎で餌をやる孝輔、浩美)

孝輔の家の庭で。

孝輔「人もいいし、自然もいい、仕事もいい。なんもかんも楽しい。」

浩美「(子どもに向かって) おやつ食べん。じゃがいも」

ナレーション「子どもたちには、土呂久のありのままの姿を感じてほしい。孝輔さんは
そうが考えています」

孝輔「昔からの公害とか、思っている以上に大変だったじゃろうき、それだけは忘れな
いという記憶と、そういうことも勉強したけど、今がすごく楽しいと言っている俺と、
すげえギャップがあって、なかなか言葉にするのは難しいけど、楽しい、楽しそうと思
ってもらえれば、子どもたちにも、土呂久でよかったち思ってもらえるけね」

(集落をドローンで撮った映像。「土呂久に生きる」の字幕)

*撮影・編集・ディレクター 生田晃子

181-3 UMK制作「山峡に咲く一土呂久100年の記憶一」(2020年5月26日放送、雪丸千彩子記者)

*テレビ宮崎開局50周年・第29回FNSドキュメンタリー大賞受賞、2020年12月20日関東地区放送

佐藤ツルに関するところのみ

(菜の花の中で働く。ヨモギ・ワラビを採る)

ツル「新芽の方がいきよ。冷凍しとくよ、これ(ワラビ)、ゆがいて。ゆがいたら、なんでも料理になるとよ。鉦山が操業しよころは、なかつた、なんも」

(母屋。台所で妹とテーブルに座るツル)

ツル「終戦後じゃけね。子どもたち、今日は運動会とかあつたから、花見とかね。映画は東京から直接送ってくるき。いちばん新しいとを見せてくれよつた。錦之助の若い時の映画、新しいのがきよつた」

ナレーション「幼いころ、鉦山のあとに残る窯の白い粉にひかれました」

ツル「椀をもって行きよつた。2つくらい持って行くとよ、ままごとしに。向うに女の子がおつたとよ。そん子は、私と遊んで、明るる日、死んで帰ってきた。前の日までは遊んでいて、じゃき、私はおこられたわ。あつこに遊びに行くから、あん子も死んだつたつて」

ナレーション「ツルさんの体にも異変が起きました」

ツル「ここへん(顔)なかぶれてね。湿疹よ。えらいかつたわ。ごはんも食べきらんごつ、口があからんと。小学校5年のころは、黄疸まで出てね。長うせんうち死ぬるち、学校に満足いけんとよ。肝臓が悪い気ね」

(「土呂久鉦山被害者の会」と書いたたすきを出して見せるツルさん)

ナレーション「従兄弟が原告の一人だつた佐藤ツルさん。土呂久から裁判の様子を見守っていました」

ツル「ほんと、やっぱり、行政が無視しとつて、村ん人が苦勞したのがわかちよるけね。よう葬式がありよつた。じゃけ、最後まで(裁判を)やるだけやちもらわなと思うちね。嘘じゃねえとじゃけ、本当のことじゃきね」

ナレーション「公害は住民の間に、見えないひずみをうみだしたのです」

(台所に富喜男、ツル、姉、妹が座っている)

ツル「前はね、反対運動みたいな、裁判したら、いろいろ売れんとか、農作物が売れんとかあつたとよ。嫁に来てがのうなるとか、反対する人がおつたやけど、やっぱ、それ

を押し通して裁判さしたきね」

(アジア砒素ネットワーク主催の土呂久フィールドワーク。学生たちを前に台所で)
ツル「ありがたいことやと思う。少しでも土呂久のことに興味持って来てくるとじゃから」

(薬師堂の前で)

ナレーション「ツルさんが伝えたいのは、ただ一つ」

ツル「自然を壊すような事業はいれたらいかんち、大学生やら来たときは、言うてきかすと。自然を壊すような事業は絶対にいかんよち」

(カルイを背負ったマリ子が母屋を訪ねる)

マリ子「ごめんくださいーい」

ツル「あらまあ。いたつね、あんた。(タケノコが) できちよんね」

ナレーション「春を告げる山の恵み」

ツル「あるばい。寄るね、お茶いっばい」

ナレーション「山間の集落には、明るい声がひびいています」

181-4 大学生による土呂久環境学習教材の提案

卒論発表「高千穂町土呂久地区の過去と現在をつなぐ環境学習教材の提案～佐藤ツルさんのライフストーリーを中心とした学習教材～」の要旨

発表者：宮崎国際大学教育学部児童教育学科4年川越怜奈

指導教員：坂倉真衣

1. 背景 環境教育の現状

環境教育のねらい：持続可能な社会づくりに貢献する人材の育成

環境教育のはじまり：公害（教育）が環境教育の原点

公害教育の現状と課題 日本では様々な公害があるが、4大公害に関する教材が中心で地元の公害（土呂久地区の砒素公害）について知る機会が少ない

現存する土呂久砒素公害に関する学習教材の現状と課題：現在の土呂久の人びとの暮らしや今の土呂久のようすが分かる教材が少ない

2. 目的：土呂久の歴史だけでなく、今の土呂久の人びとの暮らしも合わせた環境学習教材を開発すること

3. 方法

- ・土呂久砒素公害を経験し、現在も土呂久に住む佐藤ツルさんのライフストーリー・インタビューをおこなう
- ・ツルさんのライフストーリーをもとに土呂久の過去と今をつなぐ学習教材を作成

する

ライフストーリー・インタビュー：2022年12月14日10時～12時。土呂久公民館。

幼少から現在までのツルさんの生活について（砒素公害の経験も踏まえて）。

4. 結果

- ・時系列で60項目に整理し、17の関連項目に分類。
- ・「公害と隣り合わせの生活」「ツルさんの見た砒素による山の被害」から、当事者ならではの言葉で砒素公害について学ぶことができる。
- ・「ツルさんの大切にしてきた神様」「母から教わった生きる知恵」から、持続可能な社会を意識できる。
- ・作成したスライド教材（全12枚）

現存する土呂久地区の砒素公害に関する教材→土呂久の社会的出来事の年表

ツルさんのライフストーリー→当時のツルさんの経験や思い

⇒①現在の土呂久地区について知ろう

②過去の土呂久地区での砒素公害（年表・ツルさんの経験・公害の跡）

③過去と現在での土呂久地区の人々の生活

5. 考察

<期待できる成果>

- ・ツルさんのライフストーリーを中心にすることで歴史的事実を身近に捉えることができる
 - ・砒素公害を経験した土呂久地区の人々の生活と自分たちの生活を比べることで、「持続可能な社会の構築のためにどのように行動していくことが望ましいか考えさせることができる」
- ⇒小学校における環境教育のねらい＝環境に働きかける実践力の育成

<課題>

- ・土呂久地区の砒素公害に関する教材を活用した学習プログラムの作成

181-5 佐藤ツルさんの追悼

佐藤ツルさんへの感謝の気持ちと想い（宮崎国際大学教師、坂倉真衣 1923・03・21）

学生たちと土呂久を訪れた際に、ツルさんはいつも暖かく迎えてくれた。学生たちに「あんたたちは孫というよりひ孫じゃ」と笑って話かけながら、分け隔てなく関わり、当時の暮らしを感じられる「こんにやく作り」などを教えてくださった。

フィールドワークで土呂久を訪れた2022年12月13,14日が、ツルさんにお会いできた最後になってしまった。このときのフィールドワークで、ツルさんは、学生たちからの2時間にも及ぶ「ライフストーリー・インタビュー」に答えてくださった。土呂久

で生きるツルさんが経験されてきたことを、「ツルさんの人生の物語」として聴かせていただくことができたら...と環境教育論の受講生たちと計画をしたものだ。

(まさかこれがお会いできる最後の機会になるとは思いもせず、訃報を聴いた時には涙が止まらなかった。患われていた病気のことも後から聴き、インタビューにも無理をして答えてくださったのではないかと。学生たちも大変ショックを受けていた。)

インタビューの中で、ツルさんは、当時の鉱害の様子を、「赤茶けた山」「(煙を吸い込んだ薪を燃やすと青い炎が出ていた様子) 幽霊幽霊言うて、ね」など、当事者ならではの、言葉でありありと語ってくださった。

そして、「今の土呂久で好きな場所は」という学生からの質問に対しては、「鉱山の思い出がいっぱいあるから」という理由で、2022年11月に学生たちが跡地を整備したことに感謝の気持ちも述べつつ、「盛実さんの(が植樹をされている)公園(鉱山跡地)」を挙げられた。

土呂久でツルさんに話を聴かせてもらうときには、土呂久の今と過去とを同時に感じられるような、とても不思議な気持ちになった。それは、語られる言葉から、ツルさんの生き方や想いに触れ、82年間土呂久で生きてこられたツルさんの人生の物語がありと感じられてくるからであろうと思う。私たちが、土呂久の今と過去とを横断的に実感することができたのは、82年間土呂久で生きてこられた、穏やかで優しく、強い、ツルさんという存在を通してであった。

学生たちと土呂久を訪れた際に、ツルさんはいつも暖かく迎えてくれた。学生たちに「あんたたちは孫というよりひ孫じゃ」と笑って話かけながら、分け隔てなく関わり、当時の暮らしを感じられる「こんにやく作り」などを教えてくださった。

フィールドワークで土呂久を訪れた2022年12月13,14日が、ツルさんにお会いできた最後になってしまった。このときのフィールドワークで、ツルさんは、学生たちからの2時間にも及ぶ「ライフストーリー・インタビュー」に答えてくださった。土呂久で生きるツルさんが経験されてきたことを、「ツルさんの人生の物語」として聴かせていただくことができたら...と環境教育論の受講生たちと計画をしたものだ。

(まさかこれがお会いできる最後の機会になるとは思いもせず、訃報を聴いた時には涙が止まらなかった。患われていた病気のことも後から聴き、インタビューにも無理をして答えてくださったのではないかと。学生たちも大変ショックを受けていた。)

インタビューの中で、ツルさんは、当時の鉱害の様子を、「赤茶けた山」「(煙を吸い込んだ薪を燃やすと青い炎が出ていた様子) 幽霊幽霊言うて、ね」など、当事者ならではの、言葉でありありと語ってくださった。そして、「今の土呂久で好きな場所は」という学生からの質問に対しては、「鉱山の思い出がいっぱいあるから」という理由で、2022年11月に学生たちが跡地を整備したことに感謝の気持ちも述べつつ、「盛実さんの(が植樹をされている)公園(鉱山跡地)」を挙げられた。

土呂久でツルさんに話を聴かせてもらうときには、土呂久の今と過去とを同時に感じられるような、とても不思議な気持ちになった。それは、語られる言葉から、ツルさんの生き方や想いに触れ、82年間土呂久で生きてこられたツルさんの人生の物語がありありと感じられてくるからであろうと思う。

私たちが、土呂久の今と過去とを横断的に実感することができたのは、82年間土呂久で生きてこられた、穏やかで優しく、強い、ツルさんという存在を通してであった。

181-6 佐藤ツルさんの公害病認定（2020年5月）

2021年10月30日宮崎日日新聞連載「土呂久は今③」

高千穂町岩戸の土呂久・南地区に住む佐藤ツルさん（81）は昨年5月、県が続ける住民の経過観察検診によって、前年の夫・富喜男さん（84）に続き慢性ヒ素中毒症の認定患者となった。

1922（令和4）年版宮崎県環境白書より

健康被害者の認定の推移

健康被害の被認定患者は、令和4年3月末現在、男117名、女98名、計215名（うち173名死亡）です。

令和2年5月 3名

181-7 佐藤洋さんの願望

1989年12月宮崎日日新聞連載「命あるうち」より

（*第174話と重複）

佐藤洋さん「私たちの世代は村がどんどん過疎になっていくのに危機感を持っている。おやじの代とは違って、訴訟したとか、せんというより、ヒ素で汚染された枯れ木に緑が戻っていったように、村が一つになるのを望むんですよ。昔のようにですね」